

氏 名 周 藤 多 紀
 学位の種類 博士（文 学）
 学位記番号 文博第 240 号
 学位授与の日付 平成 15 年 3 月 24 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 研究科・専攻 文学研究科思想文化学専攻
 学位論文題目 トマス・アキナスの認識論
 ——魂の諸能力の協働——

論文調査委員 (主 査) 助教授 川 添 信 介 教授 伊 藤 邦 武 助教授 中 畑 正 志

論 文 内 容 の 要 旨

トマス・アキナスの認識論は、トミズム復興がはじまった19世紀後半以降、彼の形而上学と並んで、トマス・アキナス研究の主要なトピックであり続けてきた。本論文は「魂の諸能力の協働」という観点から、そのトマス・アキナスの認識論の再検討を試みたものである。

本論文は、序論と結論に加え、全5章からなっている。まず序論「トマスの認識論の研究史と本研究の特色」においては、今後のあるべき「トマスの認識論研究」像を提示するために、19世紀末以来試みられてきた、アキナスの認識論に対する様々なアプローチを振り返っている。二十世紀のアキナス研究において、その手法が大きな影響力をもっていた(a)ルーヴァン学派、(b)トロント学派、(c)超越論的トミズム、(d)分析的トミズムの四つの学派を取り上げ、各学派のアキナスの認識論解釈の特色を考察している。概括的に言って、ルーヴァン学派はアキナスの認識論の「批判的」ないしは「内在主義的」側面を、トロント学派は「経験論的」側面を、超越論的トミズムは「アプリオリ」要素を、分析的トミズムは「外在主義的」側面を強調する傾向にあることが指摘される。同じアキナスのテキストを巡って、このように多様な解釈が提示されてきたことは、この間の世界の哲学界の潮流の変化だけではなく、アキナスの認識論自体のもつ多面性を示すものである。本論文は、その多面性に配慮した正確な解釈を目指しつつ、とりわけ「魂の諸能力の協働」に着目することで、アキナスの認識論の哲学的意義を明らかにすることを意図している。

第一章から第四章においては、アキナスが人間の認識の様々な場面において、「魂の諸能力の協働」を主張していることを、アキナスのテキストに即して明らかにしている。各章で問題となる認識の場面は、知性（第一章）、内部感覚（第二章）、誤謬（第三章）、倫理的、宗教的認識（第四章）である。第Ⅰ部（第一、二章）では、認識能力相互の協働が、第Ⅱ部（第三、四章）では認識能力と欲求能力の協働が焦点となっている。

第一章「トマス・アキナスにおける能動知性」では、アキナスの知性論における古典的問題である「能動知性（*intellectus agens*）」を軸に、アキナスの知性論の正確な全体像を提示することが試みられている。アキナスは、厳密な意味での知性、身体器官に依存しない認識能力を「能動知性」と「可能知性（*intellectus possibilis*）」の二つに区分している。『神学大全』などの記述によると、アキナスの能動知性は、質料的な事物の本質から質料を切り離すという「抽象」の作用によって、可能知性が認識するのを助ける「補助的なもの」という印象を受ける。しかし、『命題集注解』をはじめとする前期著作における能動知性に関する記述は、能動知性が人間の魂に内在するとアキナスが主張する根拠が、一般にそう理解されている「抽象」以外にもあることを示唆する。アキナスの知性論は、アキナスの魂の本質や能力についての見解に基づいており、可能知性は魂の「自存性」から、能動知性は魂の「自存性」と「形相性」の双方の根拠から、その存在を要請されると解されるべきである。「抽象」は魂の「形相性」に基づいた、能動知性の存在理由である。能動知性の存在理由として、魂の「自存性」に訴えることは、神的知性の分有に比せられるような能動知性のステイタスを示すのには有効だが、離在知性論を支持するプラトニズムとアキナス自身の見解との相違を明確にすることが難しい。アキナスの

意図を正確に汲むなら、後期著作におけるアキナスは、能動知性と可能知性の協働を強調することで、能動知性の特殊なステータスを傷つけることなく、人間の知性認識活動の一体性を主張することに成功していると言える。

第二章「トマス・アキナスにおける「思考力」」では、内部感覚の一つとされる「思考力（vis cogitativa）」の抽象作用への関与に着目している。アキナスの内部感覚論の中でも見過ごされがちな「思考力」であるが、アキナスは「思考力」を諸内部感覚の中で最上位、感覚的部分と知性的部分の境界上に位置づけている。このような特殊な存在論的位置にあるために、「思考力」は、知性による影響を直接受けることが可能である。表象像の形成に関与する内部感覚としては表象力が代表的なものと考えられるが、「思考力」は時として、知性の影響を受けながら、表象像の形成に関与する。アキナスが「思考力による表象像の準備」と呼ぶものは、比量によって表象像の中の事物の普遍的特徴を浮かびあがらせるという、「思考力」の抽象作用への関与を指している。抽象作用は、能動知性の働きというよりも、「思考力」を中心とし、表象力や記憶力といった内部感覚が能動知性に協働することで成し遂げられる働きと理解される。

第三章「トマス・アキナスにおける誤謬の問題」では、これまでのアキナス研究において論じられることが少なかった「誤り」の考察を通して、アキナスの認識論の基本的な特徴を明らかにしている。ノーマン・クレマンの論文「不可謬性、誤り、無知（Infallibility, Error and Ignorance）」（1991）の問題提起に基づき、アキナスの著作には、懐疑的傾向性がほとんど見られないという「認識論上の楽観主義（epistemological optimism）」と、アキナスはデカルト同様、誤りに意志の働きが根源的な仕方に関与すると考えているという二点に焦点が当てられている。前者の点に関しては、アキナスの「認識論上の楽観主義」は、我々人間が簡単に真実を認識できるという単純な主張ではないことを、アキナスのテキストに認められる「信頼性説（reliabilism）」的要素と「（事物の）本質の不可知性テーゼ」を指摘しながら説明している。アキナスは、我々の認識能力がなぜそのように信頼できるのか、さらには、どのような場合に、どのような理由で、そのように信頼できなくなるのかについての説明を有している。アキナスは、事物の本質そのもの、ないしは本質の主要部分を構成する実体形相は、我々の知性にとって不可知であると主張している。後者の点に関しては、意志が知るべきことに十分な注意を注がない間に知性が判断を下してしまうという、意志と知性の協働によって誤謬が生じることを、人類の最初の誤謬と原罪以後の人間の誤謬という、人間が誤りを犯す二つの場面に即して説明している。

第四章「トマス・アキナスにおける親和性による認識」では、アキナスが『神学大全』第二部で「完全な理性の使用による」ものと対置する形で提示している「親和性（connaturalitas）による」正しい判断について論じられている。そのテキストを読む限り、「親和性の認識」は、ある徳を有するものはその徳が関係する対象を認識するための適応性を有し、その適応性によって対象を正しくないしはより完全な仕方では認識することができるという認識のメカニズムを有している。「親和性の認識」について、アキナスは体系的な説明を与えていないが、アキナスの倫理的、宗教的認識論において、重要な役割を担っていることは確かであり、倫理的場面においては非推論的な倫理的判断に、宗教的な場面では神秘的な認識に関与するとされる。問題となる「親和性」は、魂の欲求能力に関わる親和性、つまり感覚的ないしは知性的欲求能力の内に生じる適応性を指している。親和性は、認識の働きの「始動因」としてではなく、認識の働きを「特定する（specificare）原因」として関与する。欲求能力の内に形成される親和性は、その親和性がもたらす特定の対象に対する強い志向性によって、認識能力の対象を決定づける。認識主体は、自らの欲求能力の内に、特定の対象に「類似したもの」（これが「徳」にあたると考えられる）を形成し、その対象への親和性を獲得することではじめて、その対象を認識することが可能となる。つまり、「親和性の認識」は、諸々の徳によって完成された欲求能力と認識能力との緊密な協働によって成立するような認識の様態である。

第一章から第四章での具体的な「魂の諸能力の協働」の事実の指摘を踏まえ、第Ⅲ部をなす第五章「トマス・アキナスの認識論の基本的性格」では、アキナスが「魂の諸能力の協働」を強調する哲学的理由が考察されている。まず、アキナスが「認識論」を「認識論」としてではなく、あくまでも「魂論」ないしは「人間論」の一部として論じていることに注目した上で、人間に関しても「実体形相唯一説」を貫き、人間の魂の本質の一性を強調する立場にあったアキナスにとって、同一の本質から流れ出る魂の諸能力が、認識も含めた人間の様々な活動において、「協働する（concurrere）」と考えるのはごく自然なことであった。魂のある能力はその働きが強い時、「湧出（refluentia）」ないしは「横溢（redundantia）」によって、他の魂の諸能力に影響を及ぼす。魂の各能力は、能力として独立した存在であり、他の能力に依存することなくそ

の能力に固有な働きをもつが、他の能力の働きの影響を受けることで、他の能力とのある種の相互作用（「協働」）が生じる。「魂の諸能力の協働」の主張は、知性の働きを感覚や欲求の働きから完全に独立しうるものとして捉えようとする極端な「知性主義」を避けるという意味で、かつ、その主張が我々の経験によって裏付けられているという意味で、基本的には「アリストテレス的」であると言える。しかし、「魂の諸能力の協働」という現象が、どのようなメカニズムで生じるのかを説明するには、「湧出」や「横溢」のような「プラトニズム的」用語が重要な役割を果たしている。

本論文の最後に設けられた「結論と展望」では、「魂論」ないしは「人間論」に基づいた「魂の諸能力の協働」の主張が、哲学的にどういう意義をもつかが検討される。このアキナスの認識論の基本的特色は、トロント学派や分析的トミズムの諸研究においてすでに指摘されているが、アキナスの認識論が、确实性の探求や認識のプロセスの解明を目指す近代認識論の枠組に捕らわれていないことを示すものとして、積極的に評価されるべきである。実際、現代の「徳認識論 (virtue epistemology)」や「社会的認識論 (social epistemo logy)」の論者によって、アキナスが先駆的な人物として積極的に評価されているのは、彼らが批判するような近代的認識論とは異なる枠組の中で、アキナスが認識の諸問題を考察しているからであろう。古代・中世的伝統を優れて集約するアキナスのテキストは、「徳認識論」や「社会的認識論」といった新しい認識論の方向性に貴重な示唆を与えるものとしても読まれうるのである。

論文審査の結果の要旨

13世紀のスコラ学者トマス・アキナスは、哲学と神学の両方にまたがって、今日でも学ぶべき点の多いきわめて豊かな体系を残した。彼の認識論もまた哲学的に重要な領域の一つであることは間違いない。本論文はこのアキナスの認識論を人間の魂のさまざまな能力の「協働」という観点から、包括的に解明しようとする試みである。すなわち、論者は世界の認知や人間の行為における規範の把握といった認識作用において、感覚や知性、さらには意志といった諸能力が相互にどのように関係しあっているのかを明らかにしようとしている。これまでのアキナス認識論の研究では、上記の能力ひとつひとつについては相当に濃密な研究が積み重ねられてきているが、諸能力の協働という視点は重視されてこなかったことを考えると、本論文の目指すところは意義深いものであると言えよう。その目的のために本論文で論者は、原典テキストを綿密に読み解くという方法を堅持しながら、膨大なアキナスの諸著作を精査している。その結果、全5章からなる本論文の随所で独自の知見と洞察が示されているが、その主要なものとして以下の点を挙げることができるであろう。

1) 第一章は従来からアキナス認識論の中心論点であった知性、それも能動知性と可能知性の関係が論じられているが、論者は認識における能動知性の「抽象」という作用に関する初期著作、中期著作、後期著作における記述の力点の相違を具体的に辿ることをつうじて、当時の有力な解釈であった能動知性離在説へのアキナスの反論を読み取ることに成功している。しかも、そのアキナスの反論の基礎には人間という存在とその働きとしての認識活動を一体のものとして捉える視点があることにまで遡って論じられていることは特筆に価する。

2) 第二章の主題である「思考力」はこれまでのアキナス研究でほとんど取り上げられてこなかった論点であり、そこに注目して内部感覚と知性との緊密な関連が描き出されていることは大きな成果と呼ぶに値するものである。アキナス自身のわずかな量のテキストに対して、諸能力の協働とその基礎にある人間存在の一体性という枠組みを適用することによって、それ自体としては動物とも共通する感覚的能力である思考力が、人間においては知性的活動の準備という重要な役割を持つことが明らかとされているのである。

3) 第三章の「誤謬」の問題も従来のアキナス研究では「真理」の問題の陰に隠されて等閑視されてきたものであり、クレツマンなどの近年の欧米の問題提起を受けて論者がわが国でほとんど最初にこの論点を本格的に取り上げたと言えるものである。現代知識論で議論されている「信頼性説」の要素をアキナスのテキストに読み取るとともに、誤謬が単に知性の欠陥としてではなく意志の働きの不十分さをもその要因とするという指摘は、神の創造と原罪とを前提とするキリスト教思想家としてのアキナス理解としては首肯できるものとなっている。

4) 第四章の主題である「親和性による認識」も、他の論点と同様に、これまで十分に研究の対象とされてこなかったものであり、論者のまなざしの一貫性を示している。アキナスの認識論は、受け入れられるものとしての認識対象が受け入れられるものとしての認識主体のあり方に応じて認識されるという基本的な原則を持つと一般に見なされている。だが、論者は倫

理学的認識や宗教的認識の場合にはそれとは反対に、認識主体が特定の状態を獲得することによって認識対象がはじめて認識対象となるという可能性をアキナスが認めていることを明らかにしている。この親和性による認識は、いわゆる客観的・科学的認識とは異なった次元であるにしても、ものごとを「知る」という人間の働きの日常的な直観に即したものであり、アキナスの中にこのタイプの認識論が認められるという指摘は重要である。

5) 以上の重要な個別的論点を受けて第五章では全体の総括が行われているが、論者はアキナスの「認識論」とされる議論全体が実は魂論ないし人間論という存在論的な場面に位置づけられているという重要な視点を再確認している。その上で、魂のさまざまな能力が協働することの根拠を人間の実体形相唯一説というアキナス独自の立場におき、その実相がある能力が別の能力へと「湧出」し、「横溢」してゆくという概念によって表現されているという新たな解釈を提示している。

以上のように、本論文はトマス・アキナス認識論の理解に貴重で重要な貢献をなしたものであると評価できるものである。とはいえ、本論文に不十分な点がないわけではない。論者の言う魂の諸能力の協働という概念は、一般的には首肯できるものであるとはいえ、個々の異なった場面で生じているとされる協働の実態は相当に異なっており、全体を一つの概念で捉えきれない面が残っていると思われる。この点はより一層の厳密な分析と論述が望まれたところである。また、いくつかの論点に関して、議論が現在進行中である現代知識論の諸概念とアキナス解釈とが接合されているが、その論述にはさらなる配慮が必要であったと思われる。とはいえ、これらは本論文の提示した重要な成果を著しく損なうものとは言えず、論者の今後の研鑽によって克服されるものと思われる。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成14年12月20日、調査委員3名が論文内容とそれに関連したことがらについて口頭試問を行った結果、合格と認めた。